



ひ た ち の く に

常陸国と

し も う さ の く に

下総国の

むかしの家

【体感ルート・ガイドマップ】

利根川・鬼怒川・小貝川水系編



茨城県建築士会
まちづくり委員会
推奨

はじめに

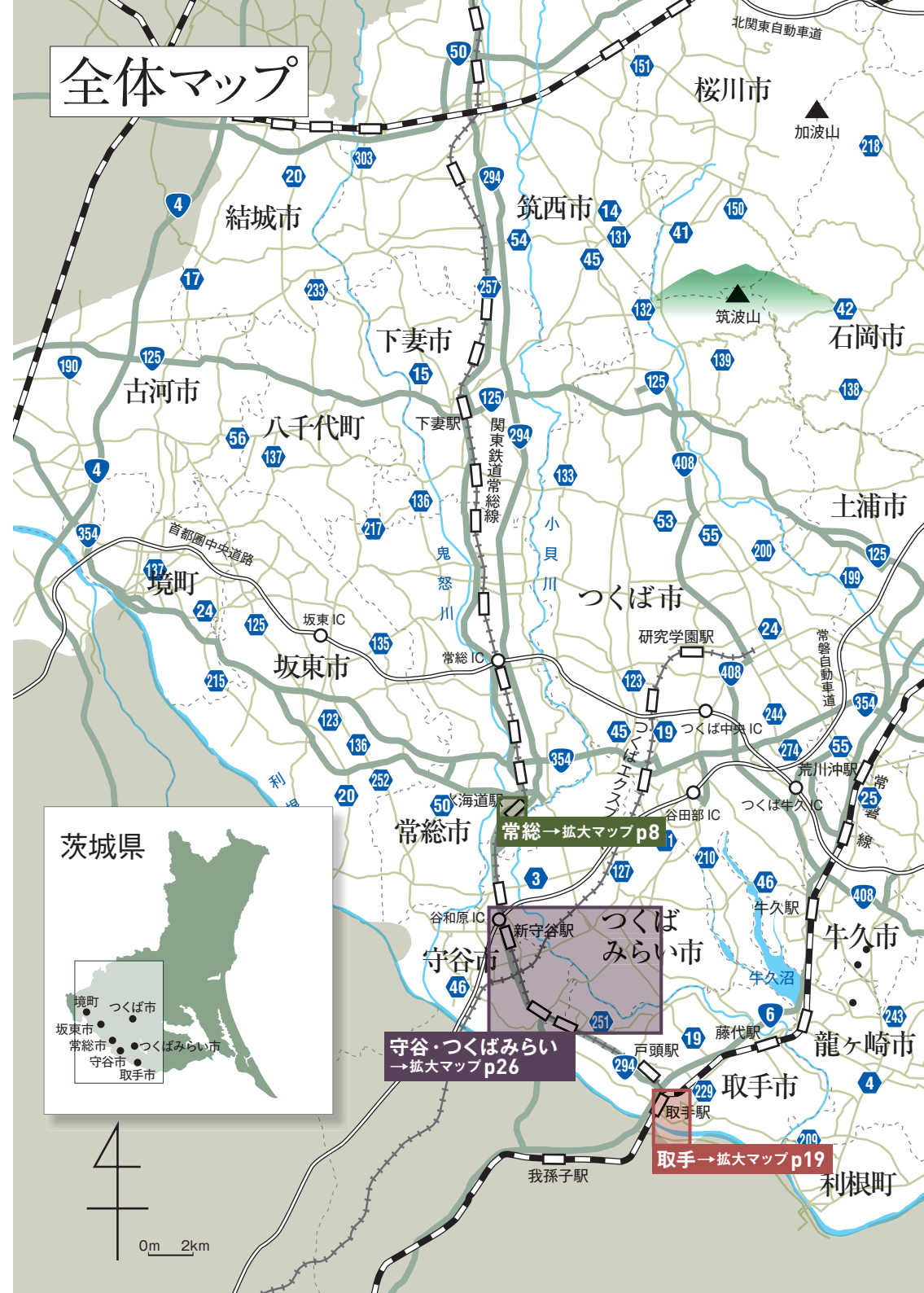
茨城県建築士会まちづくり委員会では、平成19年から、県内に残る歴史ある建物を“むかしの家”として再評価し、その魅力を伝える「体感ルートマップ」の作成に取り組んで来ました。

ライフスタイルの変化、後継者不足、改修費の負担といった社会事情に加え、大震災、竜巻、洪水といった自然災害にも見舞われ、多くの歴史的建物、街並みが失われているなか、ますますこの冊子の役割が大きくなっていくであろうことを実感しています。

シリーズ6回目となる今回は茨城県の南西部に位置する常総市、取手市、守谷市、つくばみらい市、つくば市、坂東市、境町といった主に河川沿いに栄えた街を巡るルートを選んでみました。水運、灌漑など水利と洪水による水害など河川との関係の歴史を思い起こしながら街歩きを楽しんでいただくと、より感慨深い小旅行になるのではないのでしょうか。

また、この冊子が、古建築の魅力、価値を見つけるにとどまらず、かつての建物の立地や街並みと当時の歴史を再認識することで、自然環境が厳しくなっていく現代での建築、都市計画のあり方、住まい方を考え直し、これからのまちづくりを見直すきっかけになればと思っています。

茨城県建築士会
まちづくり委員会一同



常陸国と下総国のむかしの家

【体感ルート・ガイドマップ】

利根川・鬼怒川・小貝川水系編

[目次]

1 全体マップ

常総

- 4 坂野家住宅 — 広大な敷地に建つ豪農屋敷。豪壮な主屋と瀟洒な書院の美しき対照
- 8 水海道市街地 — 水上輸送の中継地としてさかえたまち
- 10 五木宗レンガ蔵 — 富豪の廻船問屋が建てた3階建煉瓦造りの蔵
- 11 江戸屋薬舗／旧報徳銀行
- 12 二水会館／高田歯科医院／武道館
- 14 長塚節生家／野村醸造

取手

- 16 旧取手宿本陣 染野家住宅 — 大名らの宿泊にも利用された優雅で品格あふれる住宅
- 19 取手市街地
- 20 新六本店 — 二度の震災に耐えた蔵が伝統の味を守る
- 21 田中酒造店 — 見世蔵はなんと230年前の建物。まさに取手の歴史を見つめてきた酒蔵
- 22 長禅寺三世堂 — 参拝者の動線交差を防止する創意に満ちた珍しい建築様式

守谷・つくばみらい

- 25 小菅家住宅表門・かやの木 — 重量感ある薬医門の奥にある、明治初期の主屋で蕎麦を
- 27 結城三百石／間宮林蔵生家

つくば

- 30 五角堂 — ユニークな五角形の建物は、高度な建築技術の結晶
- 32 沼尻家 — 地域の組頭を務めた旧家の優美な佇まい
- 34 根本家 — つくばの文化人の寄り合い場

坂東・境

- 36 秀緑 — 歴史ある酒蔵の施設すべてをリノベーション。楽しんで滞在できる観光交流センターへ
- 38 野口熊太郎茶園 — 由緒ある「さしま茶」の、伝統と魅力を今に伝えるレトロモダンな茶舗

- 40 タイムテーブル
- 41 茨城県建築士会について

コラム【いばらきみより豆知識】

- 7 坂野家の繁栄と「飯沼新田開発」
- 13 明治のハイカラ校舎「旧水海道小学校本館」

コラム【いばらきみより豆知識】

- 23 水深を生かした河岸として発展。「小堀（おおほり）の渡し」
- 水戸街道の宿場町として賑わいを見せた取手のまち

コラム【いばらきみより豆知識】

- 27 現在は桜の名所として知られる、関東三大堰のひとつ「福岡堰」
- 28 北方の海峡に名を残す間宮林蔵

コラム【いばらきみより豆知識】

- 33 科学技術のまち「つくば」のもうひとつの顔。

コラム【いばらきみより豆知識】

- 39 初めて海外に出た緑茶「さしま茶」

鬼怒川と小貝川の
河岸で活躍した
廻船問屋の記憶が
色濃く残るまち

常総

坂野家住宅

広大な敷地に建つ
豪農屋敷。豪壮な主屋と
瀟洒な書院の美しき対照



四季折々の美しさを見せる庭園の中で堂々と佇む坂野家の主屋

およそ1ヘクタールにも及ぶ広大な敷地を持つ豪農の屋敷跡です。国の重要文化財に指定されている表門（薬医門）・土塀と主屋のほか、書院や文庫蔵などの貴重な伝統建築を、緑豊かな趣きある庭園の中で見ることができます。

寄棟造り葺茅葺きの豪壮な佇まいの主屋は、18世紀初頭から中期にかけて建築され、その後19世紀の中ごろにかけて増



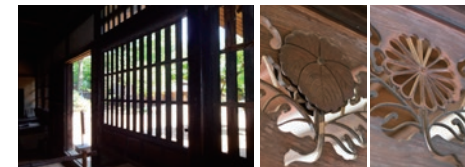
通常は武家屋敷に設えられる薬医門。坂野家の格式が伺える

改築されました。現在の主屋は、平成15～18年の解体修理により、天保9年（1838年）の姿に復元されたものです。

内部は居室部と座敷部に分かれています。太い柱と梁で構成された居室部の広間の前面には、蔀戸（しとみど：平安時代からの建具で日中は格子の間から採光をとり、夜は格子を閉めて雨戸とする）があり、その上部に欄間を設えています。この蔀戸と



上：主屋の土間部分。見上げると、太い梁を組み合わせた力強い小屋組みが確認できる。また、竈（かまど）は、大小合わせて4つが設置されており、往時の使用人の多さを伺わせる。



左：蔀戸。昼間は光を採り入れ、夜は閉めて雨戸にすることができる。右：家紋の透かし彫りが施された欄間。下：仏間。坂野家でもっとも古い部分で、客間としても使用されていた部屋



欄間による構成はこの地方ではあまり例を見ない珍しいものです。また、幕府の役人用の式台付き玄関を持つ座敷部には、透かし彫りの欄間や長押の釘隠しなど、客間としての意匠が際立っています。

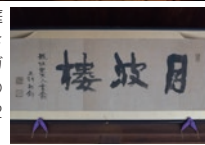
平成10年より水海道市が敷地と屋敷を譲り受けて整備・復元し、平成13年から「水海道風土博物館」として一般開放を始めました。以来、多くの映画やTV



主屋の西側に位置する2階建の書院「月波楼」



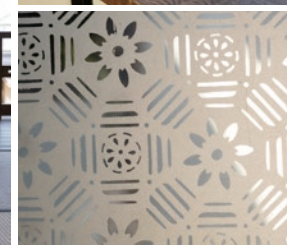
左上：坂野家の美しい庭園を見下ろすことができる2階南側の出窓。ガラスも当時のままのもので、風情がある。右は、2階座敷に飾られた書



1階座敷には山岡鉄舟の書が飾られる



建物のいたるところにモダンな意匠が施されている。すりガラスの模様も貴重なもの



モダンなタイルが貼られた浴室

番組、CFなどにも利用されています。

主屋の西側に続く木造2階建の建物は、「月波楼」と呼ばれる書院です。近代和風建築として高い評価を受けるこの建物は、平成10年の半解体工事で発見された棟札により、大正9年(1920年)に大口村(現坂東市大口)の棟梁の手で建てられたことが判明しています。

1階、2階とも床の間、脇床が整えられています。昔の歪みのある硝子が入った引き戸や、2階南面出窓上に設けられた巻上式の日除け、あるいは1階のガス灯やタイル貼りの風呂など、全体に主屋

の伝統的な和風建築とは異なるモダンな意匠を見てとることができます。

現在月波楼は、市指定の文化財として、保存・管理されています。

所在地：常総市大生郷町2037番地
 建てられた時期：主屋—江戸中期、書院—大正9年
 主屋・表門：国の重要文化財
 書院：常総市指定文化財
 入場料：一般300円、小・中・高校生100円、65歳以上無料
 問合せ：水海道風土博物館坂野家住宅
 0297-24-2131

坂野家の繁栄と「飯沼新田開発」

坂野家は、享保年間(1716～1735年)に行われた飯沼の新田開発を契機に豪農としての規模を拡大していったと考えられています。「飯沼新田開発」は飯沼周辺の23箇村が幕府に願出をして開発に至りました。各村の代表4名の中に坂野家の5代当主である坂野伊左衛門則房も名を連ね、地元の責任者(頭取)として開発に力を尽くします。この開発により「飯沼三千

町歩」といわれる新田が誕生しました。

しかし、100年も経過しないうちに、排水機能が悪化して作付のできない耕地が増え、農村が荒廃。天保14(1843)には、荒地再興の任を受けて、二宮尊徳(通称：金治郎)が仕法を施しました。この時の坂野家は11代久馬(義敬)が当主を務めており、尊徳を厚く迎え、自らの屋敷に滞在させています。

コラム
いばらき
みみより
豆知識

水海道市街地

富山倉庫



明治4年(1871年)建築の木造平屋建。この地域の明治の代表的な木造大型倉庫で、唯一現存するもの。土台は石と栗材、棟木等は松材を使用し、湿気のある河岸でも多量の大型物資を安全に保管できた。

長田屋



古商店を改装して美術、工芸品、オリジナルアクセサリー、美術雑貨など作家ものを中心に販売。

五木宗レンガ蔵



鬼怒川沿いにランドマークとして建てられた3階建煉瓦造の蔵→P10

北川質店



昭和12年(1937年)に建てられた2階建土蔵造の立派な見世蔵。下屋で一間前に出し、1階店舗空間を広くしている。店舗内に使用されている銘木である床柱、棟梁、括りつけ金庫部の樫材、化粧壁板の楠材を用いた帳場が、水運で栄えていた往時の商気勢を偲ばせる。

高田歯科医院



大正8年(1919年)ごろに建てられ、現在も現役として活躍する大正モダンの歯科医院。→P12

武道館



昭和7年(1932年)に水海道小学校敷地内に建てられた雨天体操場兼講堂。→P13

岩見印刷



昭和5年に建てられた、ロマンあふれるファサードをもちあわせた商店建築。

二水会館



大正2年(1913年)に水海道町役場として建築された西洋風建築。昭和59年に現在地に移築。→P12

江戸屋薬舗



安政6年(1859年)建築の水海道商家の代表的な建物のひとつ。軒上看板と1階ファサードの煉瓦積みが特徴。→P11

旧報徳銀行



大正後期に建築されたとされるモダンで堂々とした佇まいの銀行建築。→P11

諏訪神社大櫓



宝町大通り交差点にそびえるケヤキは水海道の巨樹老木の代表的存在。市の天然記念物に指定されている。

愛宕神社



鬼怒川と新八間堀川の合流地点そばに鎮座する、極小さな社地を持つ神社。地域の人々に尊ばれているが創建及び由緒は不明。

賓来館跡地



終戦翌年から約30年にわたって地域住民に愛された映画館の跡地。復活プロジェクトにより、1日限定で野外上映会が開かれ、商店街に活気を取り戻した。

水海道のまちの歴史

水海道の地名の由来は、坂上田村麻呂がこの地で馬に水を飲ませた「水飼戸(ミツカヘト)」だといわれます。東側に小貝川、西側に鬼怒川が流れるこの地域は、県内でも有数の水運により繁栄しました。江戸寛永年間(1624~1643年)には、関東郡伊奈家3代にわたる河川改修事業によって鬼怒川が利根川と直結し、江戸と下総、下野、会津方面を結ぶ水上輸送の中継地として栄えました。市中心部には五木宗のレンガ蔵や富山倉庫(鍵屋河岸倉庫)などの建物が残り、周辺地域の中核都市であったことが伺えます。平成18年に水海道市と石下町が合併して、現在の常総市が誕生しています。





3階建てのレンガ蔵は、水海道のランドマーク的存在

ごきそう 五木宗レンガ蔵

富豪の廻船問屋が建てた 3階建て煉瓦造りの蔵

鬼怒川と小貝川に挟まれた水海道地域は、幕末から明治にかけて舟運により河岸が発達し、舟で米穀等を江戸に輸送し、帰り船で江戸からの生活用品を調達するなどして、経済・文化の両面で発達を遂げました。

この煉瓦造3階建ての洋風の蔵は、河岸で廻船問屋を営んでいた富豪の五木田家が明治15年(1882年)に建てたと伝えられるもので、高さ10mの寄棟銅板葺きの建物です。五木田家の当主が代々宗右衛門(または総右衛門)を襲名したことから「五木宗」と呼ばれ、この煉瓦造の建物も同様の名で呼ばれています。



内部は改装され、現在は資料展示などに使われている



左:3階の窓からは鬼怒川を見渡せる。右:1階入り口付近

所在地:常総市水海道元町3421-1
建てられた時期:明治15年(1882年)
国の登録有形文化財
問合せ:常総市観光物産協会
TEL.0297-23-9088

現在は「五木宗(五木田家)」の資料展示やギャラリーなどに活用され、水海道市元町のシンボルとして市民にも親しまれています。

江戸屋薬舗

凝ったつくりの軒上看板と煉瓦積みが特徴

元禄13年(1700年)の創業当時は薬草・穀類の廻船問屋で、江戸へ米穀類を送ったその帰り船で

薬草・染料類を運び、漢方薬などを調査して近隣の医者・薬屋へと卸していました。

水海道商家の代表的な建築といえる現在の店舗は、安政6年(1859年)に14代伊右衛門が建てたもの。軒上には、時代を先取りした凝ったつくりの看板が往時のまま堂々とした姿で残ります。店舗の1階は下屋で一間前(ひん)に出し、店空間を広くしています。外装は土壁造りに加えて、外国製の煉瓦を積み、防火・防水性を保持。店表戸は、引き戸・格子戸・鍍板戸の三重の防犯構造になっています。



土壁と煉瓦積みの組み合わせが独特の存在感を放つ。煉瓦を斜めに組み合わせるなど積み方もユニーク

旧報徳銀行

堂々たる威厳を示す 大正時代の銀行建築

モダンかつ威風堂々とした佇まいの西洋風建築は、大正7~12年(1918~1923年)に建築されたといわれる旧報徳銀行です。煉瓦造、木造、亜鉛メッキ銅板葺、陸屋根の2階建てで、設計者・施工者ともに不明ですが、当時の人々が銀行に抱いていた厳粛なイメージを感じることができます。茨城県西地域においてこのような建物はほかになく、大正時代の銀行建築の姿を今に伝える貴重な遺産です。



当時の銀行の威厳を示す重厚感ある佇まい

二水会館 旧町役場の2階建風の建物、じつは平屋建



一見すると2階建だが、じつは平屋。反対側は和風の意匠になっている

大正2年(1913年)に水海道町役場として建築され、昭和59年に現在地に移築されました。正面は西洋風外観ですが、反対側は和館という二重構造になっています。接客空間としての洋館と生活空間としての和館という、明治・大正期の文化住宅の特徴を表すつくりになっています。平屋建てですが、2階建に見えるよう、窓を上下二段に配して間に胴蛇腹を廻す手法が取られています。



内部の様子

武道館 木造平屋建で格天井を持つ旧水海道小学校の体育館

武道館は昭和7年(1932年)5月に、水海道小学校の敷地内に雨天体操場兼講堂として建てられました。木造平屋建、切妻造、スレート瓦葺で、内部は格天井、

床板張りでステージも設けられています。

昭和29年(1954年)の市制施行に際しては、この建物で祝賀式典や市議会が開かれるなど、



現在も武道の稽古場として利用される

学校施設としての利用だけでなく、市の重要な役割も担ってきました。

現在は一部改修されて、同じ敷地内に建設された水海道公民館の附属施設として、市民に広く利用されています。



建物正面入り口。かつては市の重要な行事がここで開催された



高田歯科医院

今なお現役を続ける
大正モダンの診療室

大正8年(1919年)ごろに建てられて以来、現在まで歯科医院の診療室として利用されています。

通りから見ると、日本の伝統的な黒板塀・門と洋風の木造建物のコントラストが目立ちます。かつて門にはアーチ状の飾りが取り付けられていたそうです。

治療室は中2階になっており、待合室から階段を4段ほど上がって入ります。階下部分は物置に



なっています。天井の中央には見事な鳳凰2羽が彫刻された直径約45cmの台座が取り付けられており、当初はここにシャンデリアが吊られていたそうです。



診療室の天井にある照明の台座

明治のハイカラ校舎「旧水海道小学校本館」

現在は水戸市にある茨城県立歴史館の敷地内に移築されている旧水海道小学校本館。元々は明治14年に現在の常総市水海道地区に建てられました。この擬洋風でありながらも、日本人の気質が反映されたかのような質実剛健な建物は、棟梁・羽田甚蔵氏によるもので、常総市出身の女優である羽田美智子さんの祖父にあたる方とのこと。



現在は県立歴史館敷地内に移築されている

コラム
いばらき
みみより
豆知識

長塚節生家 夭折の歌人の生涯に想いを巡らす



茅葺屋根が2つ連なる端正な建物。左側が節が使っていた書院



敷地内に立つ長塚節の像

大きな長屋門をくぐると、築200余年の、2つ連なった茅葺屋根の建物が静かに現れます。

歌人・小説家の長塚節は、明治12年に豪農の子としてここに生まれました。尋常中学校在学中に患った病気の療養ののち、正岡子規の門を叩いて短歌の研究や作歌に励み、その後、小説「土」

を新聞に連載するなどの活躍を見せましたが、病気に苦しみ、九州の地で37歳の生涯を終えました。

2つ連なった屋根のうち、小さな方は節が使用していた書院です。江戸時代末期に増築されたもので、中には節が使っていた机や書物が今も残されています。米などを貯蔵していた立派な長屋

門は明治7年(1874年)に建てられたもので、当時の豊かな暮らしぶりが伺えます。

療養中に節が眺めたであろう書院前の庭には、現在も庭木が茂り、深く美しい陰影をつくっています。



節が使っていた机

野村醸造 水害で被災した店舗を地域への想いを込め再生

酒造会社の店主が、平成27年の大水害で被災した築100年ほどの木造店舗を、地域復興への使命感とボランティアなどへの恩返しの気持ちから、フレンチレストランとして再生。改修にあたり、外観は町並みの雰囲気を壊さぬよう配慮され、内装についても、2階の床を外して明るい吹き抜け空間を作りつつも、柱や梁、建具は以前のままの形で利用されています。



フレンチレストラン「BRASSERIE JOZO」の外観と店内の様子

取手

利根川の河岸と
水戸街道の宿場町。
水辺と陸の双方で
繁栄したまち





旧取手宿本陣 染野家住宅

大名らの宿泊にも利用された
優雅で品格あふれる住宅

江戸期から取手宿として栄えた旧水戸街道（県道取手・東線）からほんの少し入ったところにある表門をくぐると、正面に堂々とした風格の式台玄関、入母屋造りの茅葺屋根が姿を現し、一気に歴史

の世界へと誘います。

江戸初期の貞享4年（1687年）、代々名主を務める染野家は水戸徳川家から本陣に指定され、歴代の水戸藩主をはじめ多くの大名たちがこの建物を休憩や宿

大名らが地面に降りずに建物に入るための「式台」が付いた玄関



写真一番上が式台玄関から続く「中の間」、そこから「三の間」「二の間」を経て、「上段の間」(写真2番目)へ。菱格子の透かし欄間(写真3番目)などの細工も優雅で見事

泊に利用しました。現存の主屋は江戸後期の寛政7年（1795年）に建てられました。本陣正面には、大名など身分の高い武士が乗る駕籠を横付けして、地面に降りることなく直接建物に入るための「式台」が付いていて、そこを上がると玄関の間です。

本陣として使用した部分は、玄関正面の中の間、そこから西側の南北に、南側か

ら三の間、二の間、一番北側が水戸藩主など重要な人物が使用した上段の間です。これらの部屋には鴨居に長押が付けられ、釘隠しの意匠も凝っています。上段の間には床・違棚・天袋がついており、違棚は中央が一段高くなった井楼棚、二の間と三の間をつなぐ菱格子の透かし欄間なども優雅で、格式の高さが感じられます。



染野家の人々の生活空間は一転して質素なつくり。天井には屋根を支える太い梁が見える 本陣との境には檜かけがある

一方染野家の人々は土間の大戸から出入りしました。天井を見上げると、梁丸太が3段に組み上げられ、大黒柱が屋根の荷重を支えています。土間につながる広間・茶の間・中納戸・納戸が染野家の居住部分でした。なお、主屋西側の裏山には、水戸の9代藩主徳川斉昭公が、この本陣を訪れた際に詠んだ和歌を石碑に刻み、染野家に贈ったものが今も残っており、水戸徳川家と染野家の深い結びつきに思いを馳せることができます。

式台玄関の東側には明治初期に作られた郵便窓口が残されています。明治11年(1878年)、当時の染野家当主が五等郵便取扱役(現在の特定郵便局局長)に任命された際に改造されたとのこと。染野家の長きにわたる繁栄がここからも伺えます。

昭和62年(1987年)、敷地が取手市指定史跡となり、平成8年(1996年)には主屋と土蔵が県指定文化財となっています。



五等郵便取扱役を務めていたころの窓口

所在地: **取手市取手2-16**
 建てられた時期: **主屋—寛政7年(1795年) 表門—文化2年(1805年)**
茨城県指定文化財
 問合せ: **取手市教育委員会 教育総務課 埋蔵文化財センター**
TEL.0297-73-2010

井野 取手市街地

長禅寺
 承平元年(931年)から続く由緒ある寺。現在の建物は享和元年(1801年)に再建された。→P22

田中酒造店
 見世蔵は約230年前に建築されたと伝えられる歴史ある酒蔵→P21

旧取手宿本陣 染野家住宅
 寛政7年(1795年)に建てられた本陣。大名たちを迎えた凝った意匠が各所に。→P16

新六本店
 150年の歴史を持つ奈良漬店。店舗は東日本大震災後に、150年前の姿を基に改装されたもの→P20

八坂神社
 宿場町「取手宿」の産土神(うぶすながみ)として信仰を集めた、現在の八坂神社の本殿・拜殿は明治39年(1906年)に建てられ、その精緻な透かし彫りの彫刻は目を眩るものがあります。取手市の指定文化財。

取手のまちの歴史
 取手市は戦後、首都圏のベッドタウンとして開発されてきた一方で、そのまちの歴史は古く、江戸時代は水戸街道の宿場町として繁栄し、現在も随所にその名残が感じられます。近年は東京藝術大学取手キャンパスが市内にあることから、「アートのみち取手」としてもまちづくりを展開しています。2005年藤代町と合併しています。

小堀の渡し
 河岸が栄えていたころは水上の輸送手段として活躍。現在も船は地域の足として不可欠な存在。→P23



関東大震災、東日本大震災の2度の震災に耐えた蔵

東日本大震災後に、150年前の姿をもとに改修。2階の窓は建築当時のものが残る



社長の
田中 秀さん

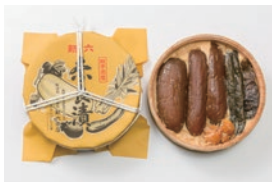
所在地：取手市取手2-13-36
建てられた時期：店一江戸末期、
土蔵一大正初期
問合せ：TEL.0297-72-0006(代表)
www.shinroku.co.jp

新六本店 二度の震災に耐えた蔵が伝統の味を守る

寛永3年(1626年)ごろに舟運を生業としていた河岸の新六が初代で、その後、この地域で豊富に流通する野菜をつかった奈良漬をつくり始め、約150年に渡りその味を守り続けています。

店舗は、東日本大震災後、平成25年に耐震補強と改装を経て現在の姿に。瓦屋根の上に掲げられた金文字が映える看板は、150年前の姿をもとに復元されたもの。店舗2階窓の縦格子と戸袋は、

当時のものがそのまま残っています。屋根と内装は、当主のこだわりを表現した見事な数寄屋造りになっています。店舗奥の敷地には、上り傾斜地形を利用して床高を変えた建物2棟が繋がる大規模な土蔵が併設されており、現在も昔ながらの奈良漬を熟成させるための蔵として使用されています。



芳醇な香りと瑞々しい歯ごたえで人気の新六の奈良漬け各種



店舗外観。店舗の裏手の広い敷地に醸造蔵がある。写真中央に見えるのが天水桶

田中酒造店 見世蔵はなんと230年前の建物。まさに取手の歴史を見つめてきた酒蔵

創業は明暦元年(1655年)、見世蔵は約230年前、酒蔵は約180年前ごろに建築されたと伝えられています。

先代が急逝し、のれん継承の危機に直面したが、「取手という場所で積み上げてきた360年という歴史を途切れさせるわけに

はいかない」という思いから、四女の小川せいこさんがご主人とともに酒造を引き継ぎました。地域の造り酒屋としてこの街に在り続けたいと、店蔵の箱階段を上った屋根裏は“やねうら画廊”として地域に開放しています。店先に置かれている天水桶(防火用に雨水をためておく大きな桶)は、銅

板屋根を葺き替えた後、緑青が混じった水が流れ込み、それをハトが飲んで死んでしまったとのこと。現



酒造りを続ける小川夫妻

在は桶の上部に網をかけ鳥が入り込まないようになっています。

所在地：取手市取手2-13-35
建てられた時期：店一江戸中期から後半、酒蔵一江戸末期
問合せ：TEL.0297-72-001
<http://www.kimibandai.sake-ten.jp/>



人気の大吟醸「君萬代」(右)のほか、さまざまな商品を販売

長禅寺三世堂

参拝者の動線交差を防止する
創意に満ちた珍しい建築様式



長い石段を上った先にある



参拝する人の流れが交差しない造りの内部は、年に一度公開される

旧水戸街道沿いに「新六本店」から北に進むと、コンモリとした樹叢が見えてきます。まっすぐに続く古い石段を登り山門をくぐると、正面に方形屋根に宝珠を戴いた白壁のお堂が建っています。

承平元年(931年)の創建と伝わる取手の名刹「長禅寺」。平将門の守り本尊という十一面観音を祀る観音堂ですが、他に「過去現在未来之三千仏」を安置したことから「三世堂」と名付けられました。

お堂は一見2階建てに見えますが、内部は3階建て。上下別々の階段を用いて参拝者の動線が交差しないように回りながら進むその形状からさざえ堂、または

さんそうどう
三匠堂と呼ばれる珍しい建築様式です。同じ様式では、会津の飯盛山にある旧しょうそうじさんそうどう
正宗寺三匠堂が有名です。

現在の建物は享和元年(1801年)に再建されたといわれ、現存するさざえ堂形式の建物では三番目の古さということですが。結城の山川大工の手によると伝わりますが詳細はよくわかりません。

所在地：取手市取手2丁目9-1
建てられた時期：享和元年(1801年)
茨城県指定文化財
問合せ：TEL.0297-74-0008

水深を活かした河岸として発展。「小堀(おおほり)の渡し」

電車も自動車も無かった頃、大量輸送には船が大活躍でした。利根川にも高瀬舟(荷物を運ぶ帆掛け船)が往来していましたが、取手は浅瀬のため小型船に荷を積み替える必要がありました。

地形上他の場所よりも水深がある小堀は、船と荷の集積場である河岸として発展、水運関係者が多数集まる拠点として繁栄しました。

まれに川の水位が下がって運行できない時など、湯船(中が銭湯と料理屋に間仕切られた屋形船)で一杯やりながら増水するまで何日も待つという、時間に追われる現代人が聞くとはとうらやましくなる程のんびりとしていたのだとか。

そんな水運も移りゆく時代のなかで衰退し、今は昔の物語です。それでも「小堀

の渡し」は今もなお、地域の中で生きています。

明治40年代からの河川改修による流れの付け替えて小堀集落が利根川の対岸となると、河岸は住民を運ぶ「渡し」として活躍。車社会となった現在も、1日7便の小さな船は、地域の人々の貴重な足となっています。



昭和30年代の小堀の渡しの様子(取手市教育委員会所蔵)

水戸街道の宿場町として賑わいを見せた取手のまち

大利根の流れに北面する取手の町は、現在では東京方面から茨城に入る玄関口として賑わっていますが、かつて水戸街道の宿場町として江戸初期のころから繁栄してきました。その様は股旅物の作品で知られる作家長谷川伸の名作「一本刀土俵入」にも描写されています。

明治29年に常磐線の前身である日本鉄道海岸線が開通するまでは、船荷の集積地として栄えたそうです。

右の写真はその少し後、大正時代の本通りの景色ですが、両側には立派な建物が並び、奥には積荷を載せた馬車が行き交う

賑やかな様子が写し出されています。

ところで日本一短い手紙として知られる『一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ』の名文は、徳川家康に仕え、その直情的な性格から鬼作左と呼ばれた本多作左衛門重次が書いたものですが、彼は晩年を取手で過ごし、今もこの地に眠っています。



大正時代の取手本通りの様子(取手市教育委員会所蔵)

コラム
いばらき
みみより
豆知識

三水系に恵まれた
肥沃な穀倉地帯として
栄えたまち

守谷・ つくばみらい

店名の由来になった大きなかやの木と現在「そばカフェ」となっている主屋



さまざまな彫刻が施された薬医門は市指定文化財になっている

小菅家住宅 表門・ かやの木

重量感ある薬医門の奥にある、
明治初期の主屋で蕎麦を

関東鉄道常総線南守谷駅から西に歩くこと20分。大きなホームセンターのすぐ西側に、明治初期に建築されたものと推測される薬医門を見つけることができます。守谷市の指定文化財となっている

小菅家住宅表門。もしかすると、「おばカフェ かやの木」といったほうが分かりやすいかもしれません。

薬医門をくぐり抜け、その妻側から薬医門全体を眺めると、女梁や袖屏のえぶりいた、うず、けたかくし、げぎみひれ、ぼたん柄振板には渦、桁隠や懸魚鱗には牡丹彫刻を目にすることができます。上層農家の表門として優れた遺例であるといえます。



広々とした敷地内。右手の蔵ではコンサートなども催される

敷地内には、同じく明治初期に建築されたものと推測される主屋や蔵が建っています。「祖父や父が暮らしたこの家は、

しばらく使われていなかったのですが、主屋や蔵を有効利用しようと改装し、主屋は茶房として、蔵はレンタルスペースとして開放しました」と店主。茶房となった主屋の内部に入ると、足元には土間、頭上には大断面の梁と根太が格子状に広がります。店内では、この趣のある明治初期の内装を眺めながら、蕎麦やスイーツに舌鼓を打つことができます。

所在地：守谷市高野1440
 建てられた時期：明治初期
 表門：守谷市指定文化財
 問合せ：TEL.0297-48-0307
<http://kayanoki2016.com>



店主の小菅 裕作さん



結城三百石 名族の住居の迫力ある丸太の小屋組み

『結城三百石』と称され、この地方の発展の中心的役割を担ってきた名族・結城家の住居だった建物です。

敷地入口には人々を迎えてくれる立派な長屋門があり、門をくぐると正面には主屋、向かって

左側には一の蔵、主屋裏手には二の蔵があります。その2つの蔵を繋ぐように自然観察路という小道が整備されています。門右奥には収蔵庫もあり、江戸初期からの文書類が保管・展示されています。

主屋内部にも、当時のくらしを知ることができるように生活道具が展示され、頭上には、長きにわたって屋根を支えてきた立派な丸太の小屋組みが広がり、当時の大工たちの技を感じることができます。



土間の上部に見える太い丸太の小屋組み



主屋の内部には、当時の生活道具なども展示されている

現在は桜の名所として知られる、関東三大堰のひとつ「福岡堰」

江戸期の新田開発に伴い1625年、灌漑用水として建設された堰であり、岡堰、豊田堰とともに関東三大堰のひとつに数えられています。小貝川と福岡堰の間を流れる用水の水辺には、約550本もの桜が並び、水面は桜色に染まります。2006年には「福岡堰さくら公園」として整備され、茨城県を代表する桜の名所のひとつとなっています。



コラム
いばらき
みちのく
豆知識

間宮林蔵生家 茨城が生んだ偉人の幼少期に思いを馳せる



昭和46年(1971年)、建てられたときの状態をもとにこの地に復元された



茅葺屋根を中から見上げたところ

旧伊奈町(現つくばみらい市上平柳)にある間宮林蔵の生家は、茨城県指定文化財史跡です。

小貝川にほど近い場所に建つこの茅葺屋根の生家は、もともとは現在地ではなく近隣に建てられていましたが、増改築を重

ねて元とは異なる形になったうえ、老朽化も進んだため、昭和46年(1971年)、増改築がなされる前の状態に近づけて現在地に復元されました。230年以上前の建築の仕様や当時の生活の様子を垣間見ることができます。

敷地内には「間宮林蔵記念館」も併設され、北方探検家としての間宮林蔵の経歴や功績を知ることができます(生家見学は入場無料、記念館入館は有料)。

北方の海峡に名を残す間宮林蔵

江戸後期に活躍した北方探検家の間宮林蔵(安永9年[1780年]~天保15年[1844年])は、常陸国筑波郡上平柳村(現つくばみらい市)の小貝川のそばに農民の子として生まれました。数学的才能に優れ、地理学でもその才能を発揮した間宮は、やがて幕府の命により北方の樺太を測量します(測量と言っても当時はほぼ探検だったといえるでしょう)。それにより樺太

が島であることが確認されました。

その功績が認められ、樺太とユーラシア大陸との間にある海峡を「間宮海峡」と称します。地図上の名称に常陸国の出身者が残っているのは嬉しいことですね。

記念館入り口に立つ間宮林蔵の銅像



コラム
いばらき
みまより
豆知識

先端技術のそばに
古代の遺跡が多く残る、
未来とむかしが共存するまち

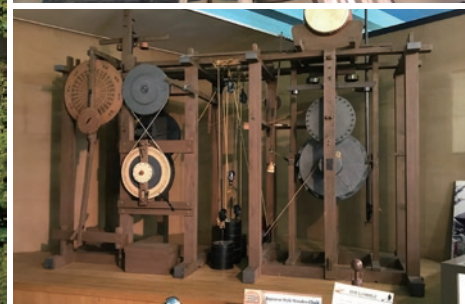
つくば

五角堂

ユニークな五角形の建物は、
高度な建築技術の結晶



てっぺんが尖ったユニークな形の茅葺き屋根



上: 5本の梁が交差している 下: 和時計のレプリカ

つくば市谷田部に建つちょんまげを
乗せたような茅葺きの建物。文化元年
(1804年) 以前に建てられたようですが、
正確な建築年代は不明です。

なんととっても平面形が五角形という
のが特徴です。では何故五角形か？ 何
のための建物か？ それは諸説ありますが、
民間科学者で発明家でもあった飯塚伊
賀七が、当時困難とされていた奇数辺形
の設計に挑戦するための物だったのでは
ないかともいわれています。そのほっこり
とした癒やされる佇まいとは逆に実はハイ
テクな設計だったのです。

広さは堂と呼ぶには小さい10坪で、内
部は土間になっており窓も無く質素なつく
りになっています。見上げると5本の梁が

交差しそこから延びる束から10本の垂木
が傘状に降りていることがわかります。

この梁の上から伊賀七の発明品であ
る和時計の部品が見つかっています。今
は土間の上に無造作に置かれていますが、
レプリカは茨城県立歴史館と谷田部郷土
資料館に展示されています。また、杵を
打った回数がカウントされる装置のつい
た米搗き機の部品も見つかっています。

とても小さな建物ですがさまざまな発
明が詰まったお堂です。

所在地: つくば市谷田部 1945
建てられた時期: 不明 (推定1818年以前)
茨城県指定文化財



沼尻家

地域の組頭を務めた旧家の優美な佇まい

手入れの行き届いた庭の正面にある端正な佇まいの主屋

お寺、神社や火の見櫓、古民家が建ち並び、かつての風情を残すつくば市金田地区の中でも、金田村組頭役を務めた旧家の沼尻家は特に目を引きます。

通りに面して朱塗りの門と彫り物細工が施された二つの門があり、朱塗りの門を抜けると、左手に真壁造りで腰高の押縁下見板張りの蔵、右手にやはり同じつくりの米蔵があります。そこを抜けると、きれいに整えられた庭に面して、右手奥にはかつて長屋として使われていた建物と、正面に寄せ棟茅葺きの主屋が趣のある姿を見せます。美しく整えられた庭の木々の

多くは、家主の沼尻氏が自ら剪定しているとのこと。

現在、蔵と米蔵はパン工房、喫茶店として、かつての長屋は藍染め衣料品の店舗として活用されています。

所在地：つくば市金田38-1

建てられた時期：主屋—江戸後期（19世紀前期）、米蔵—19世紀中期、蔵—19世紀後期、長屋—20世紀初期（大正初期）

国の登録有形文化財（主屋、米蔵、蔵、長屋の4棟とも）



2つある門。ひとつには彫り物細工が施されている



もうひとつの門は朱塗りされている



現在はパン工房として使われている蔵と米蔵



かつての長屋は藍染め衣料品の店舗として使われる

科学技術のまち「つくば」のもうひとつの顔。

ロボットや宇宙開発など科学の街、研究の街として未来的イメージのあるつくばですが、筑波山が万葉集に謡われているように、歴史あるまちという対象的なもうひとつの顔も併せ持っています。市内には縄文時代や弥生時代の遺跡が多くあり、我々建築家が建物の計画をする際には、遺跡でないかの確認を必要とされることがあ

るほどです。主だった史跡としては国指定文化財の小田城趾、大塚家住宅、平沢官衙遺跡、金田官衙遺跡をはじめ、県、市の文化財が多数あります。



平沢官衙遺跡

コラム
いはらき
ふるさと
豆知識



根本家

つくばの文化人の寄り合い場

つくば市吉瀬の集落内にあって、主屋正面に長屋門を配する風格ある屋敷構えは近世の上層農家の形式を今に残しています。長屋門を抜けるとアート作品のある庭を挟んで正面が主屋、右手には蔵があり、左手奥に移築した離れがあります。

現在は「つくば文化郷」として様々な職種の人たちが集まる拠点になっています。かつては写真家、随筆家、都市計画の事務所もありました。長屋門はギャラリーやカフェとして、主屋は食事処として活用されています。また別館には陶芸やガラスの工房があります。



上：庭の正面にある主屋。現在は食事処となっている。右：主屋の内部。下：長屋門。中にはギャラリーやカフェの店舗が入る

所在地：つくば市吉瀬字清水1680
建てられた時期：主屋—江戸末期（19世紀前半）
長屋門—明治19年（1886年）
国の登録有形文化財



鬼怒川と利根川が
形成する、肥沃な
台地の恵みを
享受するまち。

坂東・境



かつて酒造の本蔵であった建物は、梁組みを生かした「展示施設」へと改修された

しゅうろく 秀緑

歴史ある酒蔵の施設すべてをリノベーション。
楽しんで滞在できる観光交流センターへ

観光交流センター「秀緑」は、坂東市の中心に位置します。明治28年(1895年)に新潟の相澤酒造がこの地に酒蔵を築き、その後、大正時代に大塚酒造に経営が移り、以来100年余り豊かな水源をもとに6~12トン級の樽を100近く運用して栄えてきました。その後、平成に入り、残念ながら廃業したこの酒蔵を、市の観光交流施設としてリノベーション。主屋を「管理棟」、本蔵を「展示施設」、銅板蔵を「体験工

房」に改修し、さらに精米所・倉庫を解体した古材で小屋を組んだ「休憩棟」と、酒を水の流れに擬えた池の前の「離れ」の2棟を新築し、「観光交流センター秀緑」として生まれ変わりました。主屋と本蔵の2棟は、登録有形文化財になっています。

ダイナミックな梁組を生かした本蔵の一角には、かつての酒造りの様子を伝える道具やパネルが展示してあります。また、7つあった井戸の一部を活用した熱交換



「展示施設」1階部分



敷地内にあった建物や部材を再生し、「体験工房」や「休憩棟」に



「展示施設」にはかつて酒造で使用された道具も展示している

による輻射熱方式の特徴的な空調システムが採用され、古建築によくある“冬寒く夏暑い”が解消されています。

県立自然科学博物館を有し年間80万人の児童生徒や見学者が訪れる坂東市。そういった観光客を市内に誘引するための飲食スペースや地元野菜の販売スペースなども敷地内に設けられ、市の魅力をPRする施設となっています。

所在地：坂東市岩井3351
建てられた時期：本蔵—明治28年(1895年)、主屋—明治中期(1883~1897年)
主屋：国の登録有形文化財
問合せ：坂東まちづくり株式会社
TEL.0297-35-0002
<http://shuroku.com>



明治7年(1874年)創業。日本茶の製造販売のほか、平成24年には本格日本茶カフェとしての営業も開始

野口熊太郎 茶園

由緒ある「さしま茶」の、
伝統と魅力を今に伝える
レトロモダンな茶舗

明治7年(1874年)、野口熊太郎は若
干13歳で製茶業を創業しました。木造
2階建ての店舗は初代・熊太郎の時代、
明治末期に建てられ、2代目松太郎、3

代目徳太郎、4代目盛太郎の時代を経て、
現在5代目となる富太郎さんに引き継が
れています。

昭和29年(1954年)に、平書院・床脇・
床の間付きの和室と、仏壇・押入付きの
和室の二間続きに縁側・トイレを住まいと
して増築しました。その際の構造材や造
作材は、樹齢500年の1本の杉の原木
から採ったというから驚きます。

平成24年9月に、その古民家を活かし、
当茶園で栽培した「さしま茶」を振る舞
う本格日本茶カフェ「茶太郎'sカフェや
まの」をオープン。懐かしい土壁や組子
障子の欄間、腰付摺上障子、木連れ格



店舗内部。お茶のほか、お茶関連のスイーツや道具も販売



明治の建築を極力生かす形でカフェに改装



1階の奥の旧住居部分は、庭を眺められるテーブル席に

4代目店主の
野口富太郎さんご夫妻



子戸などから醸し出される落ち着いた空
間で、縁側越しの美しい庭園を眺めなが
ら、ゆったりとした気分をいただく「さし
ま茶」とオリジナルのスイーツは格別です。

所在地：猿島郡境町1144

建てられた時期：店—明治末期、住宅—
昭和29年

問合せ：TEL.0280-87-0128

www.greentea.co.jp

初めて海外に出た緑茶「さしま茶」

さしま茶は奥久慈茶、古内茶とともに
茨城三大銘茶のひとつで、生産地は境町、
坂東市、古河市、常総市、八千代町などが
挙げられます。その歴史は江戸時代初期
まで遡り、現在の境町を治めた関宿藩(現
在の千葉県野田市関宿町)は茶の生産を
奨励し、地の利を生かし、水運にて流通を



さしま茶は初めて海外輸出された日本茶

広げたとされます。

江戸末期、「さしま茶」は日本茶として
初めて海外に輸出されました。

コラム
いばらき
のみより
豆知識

タイムテーブル

- この冊子でご紹介している「むかしの家々」を1日で巡るタイムテーブル案です。
- 発着地には、常総市役所を設定しました。各時間を算出する際の移動手段は普通乗用車を前提としています。*大型車・大人数の場合は、所要時間が増すことが予想されます。
- 1日で巡るルートとしては、目的地が多めの設定になっています。より余裕を持った見学をご希望の方は、この案をもとに日程や見学地の数などをご調整ください。
- また、この冊子でご紹介している建物が広域に渡るため、下記は、建物の中からいくつかをピックアップして巡るルートの一例としてご提案しています。お時間に余裕のある方は下記に含まれない建物についても、ぜひ予定を立ててご見学ください。
- 冬季に巡る際はなるべく早めにスタートしましょう。*日の入りが早く、17時には暗くなりますよ。

見学地	見学時間	移動時間(距離)	時刻(ご参考)
常総市役所			8:30 出発
	↓	40分(20km)	車で移動
 新六本店、田中酒造店 [取手市]	60分		9:10~10:10
	↓	5分(400m)	徒歩で移動
 旧取手宿本陣染野家住宅 取手宿のまち並み、長禅寺三世堂	45分		10:15~11:00
	↓	30分(10km)	車で移動
 小菅家・かやの木 [守谷市]	60分	昼食時間含む	11:30~12:30
	↓	30分(11km)	車で移動
 水海道まち歩き [常総市]	120分		13:00~15:00
	↓	15分(8km)	車で移動
 坂野家住宅 [常総市]	45分		15:15~16:00
	↓	15分(8km)	車で移動
 坂東市観光交流センター秀緑 [坂東市]	40分		16:15~16:55
	↓	20分(10.5km)	車で移動
 野口熊太郎茶園 [境町]	30分		17:15~17:45
	↓	30分(21.5km)	車で移動
常総市役所			18:15 終了

合計: 約9時間45分 (見学時間: 約6時間40分 / 移動時間: 約3時間5分)

一般社団法人茨城県建築士会について

一般社団法人茨城県建築士会は、茨城県内に居住または勤務する建築士を中心に構成されている組織です。

組織の中には、会としての目的達成と事業活動の効率化のために委員会が設置されています。わたしたち「まちづくり委員会」では、一般の方を交えてのワークショップ、シンポジウムを実施するなどして、住みよいまちづくりに寄与する活動を行っています。

とくに近年では、茨城県教育庁のご協力をいただきながら、「いばらき地域文化財専門技術者育成研修(ヘリテージマネージャー育成研修)」を実施したり、この「常陸国のむかしの家」の冊子を制作するなど、地域に残る歴史的建造物の魅力を活かしたまちづくりに積極的に取り組んでいます。

*本会は茨城県より景観法に基づく「景観整備機構」の指定を受けています。

常陸国と下総国のむかしの家 [体感ルート・ガイドマップ]

利根川・鬼怒川・小貝川水系編

発行 一般社団法人 茨城県建築士会
会長 柴 和伸
〒310-0852
茨城県水戸市笠原町978-30
建築会館2階
TEL.029-305-0329
http://i-shikai.com

協賛 一般財団法人 茨城県建築センター

編集 茨城県建築士会 まちづくり委員会

取材(文章作成・撮影)

まちづくり委員会—岩永 至功、永井 昭夫、梶 ひろみ、杉田 次夫、篠根 玲子、李 相鉄、鎌田 富士夫、高橋 文男、清水 雅史、片岡 俊之

常総支部—岡田 一夫、松崎 マサ子、戸塚 昇、茂呂 紀洋、五代儀 研司、横関 順一、田島 洋子

土浦支部—若柳 綾子

古河さしま支部—加藤 誠洋

県央支部—平沼 清美

編集補佐 笠井 峰子(笠井編集室)

デザイン 株式会社 ユーアデザイン

初版発行 平成31年3月31日



*この冊子に掲載した情報は平成31年3月末現在のものです。



常総市の観光に関するお問合せ

常総市観光物産協会 TEL.0297-23-9088

〒303-8501 茨城県常総市水海道諏訪町3222-3 常総市役所商工観光課内



取手市の観光に関するお問合せ

取手市観光協会 TEL.0297-74-2141(代表)

〒302-8585 茨城県取手市寺田5139 取手市役所産業振興課内



守谷市の観光に関するお問合せ

守谷市観光協会 TEL.0297-45-1111(代表)

〒302-0198 茨城県守谷市大柏950-1 守谷市役所経済課内



つくばみらい市の観光に関するお問合せ

つくばみらい市観光協会 TEL.0297-58-2111(代表)

〒300-2492 茨城県つくばみらい市加藤237 つくばみらい市役所産業経済課内



つくば市の観光に関するお問合せ

一般社団法人つくば観光コンベンション協会 TEL.029-869-8333

〒300-3292 茨城県つくば市筑穂1-10-4



坂東市の観光に関するお問合せ

坂東市観光協会 TEL.0297-20-8666

〒306-0692 茨城県坂東市岩井4365 坂東市役所商工観光課内



境町の観光に関するお問合せ

境町観光協会 TEL.0280-81-1319

〒306-0495 茨城県猿島郡境町391-1 境町役場内

